C 年特定19　ルカ15章1―10節

［直訳］

1 だがあった　彼に　近づきつつ　すべての徴税人たちと罪人たちが
聞くために　彼に。
2 そして　つぶやいていた　ファリサイ派の人々と律法学者たちは
言いながら　次のことを、
「この人は　罪人たちを　受け入れる
そして　共に食事をする　彼らと。」
3 だが彼は言った　彼らに対して　このたとえを
言いながら

4 「あなたがたのうちの誰か人が
持っていて　百の羊を
そして　失って　それらのうちから　一つを
ないだろうか　残す　九十九の羊を　荒野に
そして　行く　失ったものへと
まで　彼が見つける　それを。
5 そして　見つけて
彼はのせる　彼の肩へと　喜びながら、
6 そして　来て　家に
彼は呼び集める　友だちと近くの人たちを
言いながら　彼らに、
『共に喜んでください　私と、
というのは　私は見つけた　失っていた私の羊を。』
7 私は言う　あなたがたに　次のことを
このように　喜びが　天に　あるであろう
悔い改めている一人の罪人のことで
よりも　九十九の義人のことで
ところの　悔い改めの必要を持たない。

8 あるいは　誰か女が
十のドラクメ［銀貨］を持っていて
もし　彼女は失ったら　一つのドラクメを、
ないだろうか　ともす　ランプを
そして　掃く　家を　そして　捜す　注意深く
まで　彼女が見つける。
9 そして　見つけて
彼女は呼び集める　女友だちと近くの人たちを
言いながら、
『共に喜んでください　私と、
というのは　私は見つけた　ドラクメを　ところの　私が失った』。
10 このように、　私は言う　あなたがたに、
生じる　喜びが　神の天使たちの前に
悔い改めている一人の罪人のことで。

［新共同訳］

1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。3 そこで、イエスは次のたとえを話された。4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。10 言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

①構成

ⓐ1―3節。　この段落は4節以下のたとえが語られることになるきっかけを述べている。汚れを嫌い、罪人との接触を避けていた敬虔なユダヤ人は、イエスが罪人と「共に食事をする」のを見て、つぶやく。そこでイエスはたとえを語る。

ⓑ4―10節。　「失われた羊」はマタイにも見られるたとえであるが、「失われた銀貨」のたとえはルカだけが伝えるたとえである。次のような同じ表現が使われているから、「失われた銀貨」は、ルカが「失われた羊」をもとに案出したたとえかもしれない。

持っていて
失って
ないだろうか
彼が見つけるまで
見つけて
呼び集める
共に喜んでください
私は失っていたものを見つけた
私はあなたがたに言う
このように喜びが
悔い改めている一人の罪人のことで

羊であれ、銀貨であれ、持っていたものを失ったら、見つけるまで捜し、見いだすと、友だちや近くの人を呼び集めて、「共に喜んでください。失っていたものを見つけた」と告げるように、失ったものを見いだしたときの天の喜びは大きい、ということがたとえの要点になる。一人の罪人が悔い改めるとき、そのことで、大きな喜びが神のもとにある。

②罪人と共に（1―3 節）

ⓐ14 章 35 節でイエスは「聞く耳のある者は聞きなさい」と呼びかけたが、それに応えて徴税人や罪人が「聞くために」やって来る。「近づきつつあった」は動作の継続を強調する言い回しであり、次々と集まる様子を表す。

ⓑ「徴税人」は、古代世界で税金を徴収する権利を国から請け負った個人や団体を表す。新約時代のパレスチナは税金の徴収はローマ人の徴税請負人（プブリカーニ）によって、直接には彼らに雇われた地元民によって行われた。したがって、新約聖書の「徴税人」は、ローマ人の配下となって同胞から税を徴収するユダヤ人を指している。徴税人は異邦人であるローマの支配者のために働くことや、割り当てられた税額以上の金を取り立て、自分の収入としていたことから、ユダヤ人から憎まれ、盗人や強盗の同類、「罪人」と同様に見なされていた。さらに、異邦人と絶えず接触する徴税人は、祭儀的に汚れていると見なされた。新約聖書で徴税人は共観福音書にのみ登場する。徴税人は「罪人」と一緒に登場することが多く、罪人の代表者として扱われている（マコ二 13 以下並行、ルカ一九 2）。異邦人や（マタ一八 17）、娼婦と一緒に使われたり（マタ二一 31）、利己的に生きる人間の典型として引き合いに出される（マタ五 46）。しかし、ルカ 18 章 10 節以下の「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえでは、神の憐れみを受けて義とされる者として描かれている。

ⓒ「罪人（ハマルトーロス）」は動詞ハマルタノーから派生した形容詞。ハマルタノーは「間違える・誤る」が元来の意味で、目標をとらえそこなうことや思い違いなどの失敗を表す。新約聖書では、形容詞としては「罪のある・罪を犯した」を意味するが（マコ八 38 など）、多くは名詞として「罪人」を意味する。「罪人」は神に背き、神が与えた律法を犯す者を指す。ここでは、律法学者やファリサイ派によって、日常生活の中で律法を忠実に守らないという理由で批判された人々を指している。「罪人」とは律法を守って生きる敬虔な「正しい人（ディカイオス）」の反意語である。イエスは正しい人ではなく、「罪人」を招くために来た（マコ二 17、マタ九 32）。ただし、並行箇所ルカ 5 章 32 節には「正しい人ではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためにわたしは来た」とあり、ルカでの「罪人」は悔い改めを必要とする人を表す（ルカ一五 7・10）。

ⓓファリサイ派や律法学者たちは「つぶやいていた」。この動詞形は動作の継続を表す未完了形である。ぞくぞくと「近づきつつあった」徴税人や罪人に対比して、以前から今まで「つぶやいている」エリートたちの状態が述べられている。この「つぶやく（ディアゴンギュゾー）」は前置詞ディアとゴンギュゾー（つぶやく）の合成動詞であるので、ディアの意味を汲めば「互いにぶつぶつつぶやく」の意味となる。自分たちの思惑とは異なった神の救いのみ業に「つぶやく（不平を言う）」姿は、旧約聖書にも見られる。（出一六 2 以下、民一四 2、ヨシュ九 18 などを参照）。

ⓔファリサイという名前は「分離された」を意味するヘブライ語に由来する。その名の示すとおり、彼らは自分たちを汚れから「分離された者」と誇っていた。一方、イエスは自分を罪人から切り離さずに、彼らを「受け入れた」。「受け入れる」と訳されるこの動詞、プロスデコマイはルカで 5 回使われるが、この箇所以外はすべて、救いを「待ち望む」という意味である。イエスは罪人が自分のもとにやって来るのを待ち望み、彼らを受け入れ、食事を共にすることによって、彼らとの親密な交わりを態度で表す。このようなイエスの態度はファリサイ派や律法学者には理解できず、つぶやく結果になった。

ⓕ「たとえ」。4―7 節の「失われた羊」のたとえはマタイにも見られるが、ルカはさらに「失わ

れた銀貨」と「失われた息子」のたとえを加えている。ルカ15章はこの三つのたとえによって、失われたものへのイエスの特別の配慮と、悔い改める罪人への神の愛を強調し、「失われた」ものを「見いだした」ときの喜びを述べている。この喜びは、エゼキエル18章31・32節「どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」という神の言葉を思い起こさせる。

ⓖマルコでは、神の国の本質と到来について教えるたとえが多く見られ、マタイでは、最後の審判に関する警告を教えたり、人間関係に関するたとえが多くなる。ルカでは、個人に関わり、個人の徳性を教えるたとえが特徴的である。ルカのたとえはしばしば「反面教師」を登場させるが、その人物の独白が物語の転換点となる（一二17、一六3・24、一八4・11）。

③二つのたとえ（4―10節）

ⓐマタイ福音書も「失われた羊」のたとえを伝えているが、たとえの適用は大きく違っている。マタイでは、イエスはたとえを語る前に、「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」と述べ、たとえの結びには「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」と述べている。小さな者を軽んじたり、滅ぼすことを戒めるための教えとして、たとえを用いている。

ⓑ一方、ルカの焦点は、離れていた罪人を見いだしたときの神の喜びにあるのは明かである。しかも、「失われた銀貨」のたとえはマタイにはなく、ルカだけが伝えるたとえである。二つのたとえは完全な対を作り上げており、失ったものを見つける苦労を述べ、見つけた喜びに共にあずかるようにと呼びかけることにおいて共通している。同じ主張のたとえを加えることによって、ルカはその主張を強調する。

ⓒイエスは徴税人ザアカイの物語（一九1―10）の結びで、「人の子は失われたものを捜して救うために来た」と述べている。この「失われたもの」は二つのたとえに5回使われる「失う」と同じ言葉である。この言葉によって、「失われた息子」のように、神から遠く離れた人間、つまり罪人が表されている。罪人が神を捜すよりも前に、神が捜している。二つのたとえでも、羊や銀貨が持ち主を捜し回るとは書いていない。捜すのは持ち主である。聖書が述べる「悔い改める」とは、善行を行って神に赦しを願うことではなく、神が捜し出してくれたことに気づくことであり、神の心に触れることである。

④失われたものを捜して、立ち帰ることを待つ

ⓐ「共に」を意味する接頭辞のついた言葉が5回使われている。それは「共に食事をする」（2節）、「呼び集める」（6・9節）、「共に喜ぶ」（6・9節）である。「共に」がこれほど強調されるのは、つぶやいたファリサイ派や律法学者への呼びかけなのかもしれない。すでに神のもとに立っていると考えるなら、つぶやかずに、「共に」食事をし、喜ぶべきなのではないのか、とイエスは教えている。

ⓑイエスは十字架への道を歩んでいるが、この十字架は神が罪人を見いだす場であり、罪人が神の心に触れる場である。失われたものを捜して、立ち帰ることを待つ神の心に触れるとき、人の心に悔い改めが生じる。神は人間の根本に巣くう暗闇に光を送る。人が神からの光に引き寄せられて生きるとき、天には大きな喜びがある。